

町田市議会議員・情報公開の街

吉田つとむ

交通文化都市・インターンシップ推進



左上 blog
右上 HP
下左 Mail



東京都と地方の違い、町田市に都政無し

石川県漆芸美術館（輪島市）と施設の県内配置

この記事は、「輪島塗の現状と未来の展望」①、②の続きになります。震災後に訪れた、奥能登地方の輪島市では、特に漆塗り（漆芸）の技術の継承と発展に関心を持ちました。



石川県は県立の美術館を 3 カ所持っています。一つは、メインの石川県立美術館で加賀藩家老の屋敷跡に建ち、北陸の文化芸術の中心施設です。次が加賀市にある石川県九谷焼美術館であり、3 番目が輪島市にある石川県輪島漆芸美術館です。芸術文化施設が県内に分散配置されているのが、東京都の施策と大きく異なる特徴です。ちなみに、東京都の場合は大半の施設が都心部に集中しており、まれにそのミニ施設が立川市（一部八王子市）に有る程度で、施設の分散設置志向は皆無です。そのために、町田市には東京都の文化芸術施設が全くない状態が続いています。本来、美術であれが、絵画、彫刻、版画、映像、さらにはアニメなどの分野で施設を各基礎自治体（のブロック）に分ける方法と、伝統、近代、未来の歴史基準で施設を造り分ける発想が日本に新たな文化芸術を生み出す力になっていくと考えるものです。輪島漆芸美術館を来訪した日には、馳知事などを迎えて、「第 1 回輪島塗の若手人材の養成施設の整備等に関する基本構想策定委員会」を開催していました。能登半島地震の産業復興スケジュールは、今だその計画検討の初期段階、万事これからという時期でした。

◎町田市議会の所属委員会や個別の会派では、それぞれに行政機関や他の議会を対象にした地方視察を行っています。上記の掲載する記事は、それらと異なり、独自に民間の展覧会や公的施設に直接申し込みを行い、現地見学したものも含んで掲載しています。

◎会派・個人で行った見学・インタビューも、議会の一般質問や質疑に活かしています。

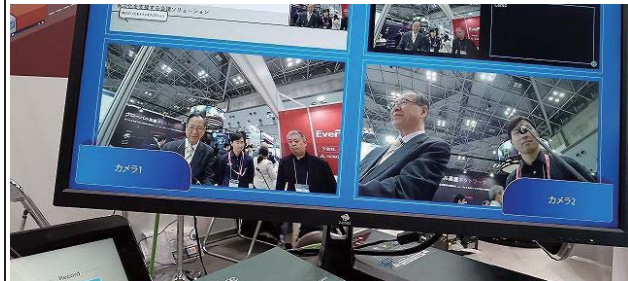
IT Week 春 2025 の出展国の特徴

中韓台はもちろん、印越からバングラ・スリランカ

東京ビックサイトに出向きました。IT Week 春 2025 の見学に出向いたものですが、出店国の広がりには驚きました。中国、韓国、台湾は当たり前に出していますが、特に、韓国はブースの配置図を別途に作っていました。また、中国は国別スペース以外にも企業単発でそれぞれに出店するケースが目立ちました。さらに、その他の国では、インドがあり、ベトナムがあり、パキスタン、ウズベキスタンがありました。また、目立ったことでは、東欧のポーランドがありました。自分が知らないところで、IT 開発が進められていることがリアルに学びました。その中で、バングラデシュやスリランカが気になりました。もう、日本が安閑としているのではなく、日本の得意とする研究開発分野を定め、集中を図る時期だと感じました。



上はバングラデシュ、反対側までスペース確保



下は台湾メーカー企業、日本製パーツも使用する

良識ある保守主義・情報公開

吉田つとむ

町田市議会議員 4 期連続トップ当選

＜編集発行＞

〒194-0011 町田市
成瀬が丘 1-14-12
サンホワイト E103-13
自宅 042-795-7361(fax 兼用)
吉田つとむ後援会
yoshidaben@gmail.com



東京都の高齢者低額バスの引き下げ策は、高齢者への過大施策

東京都は高齢者を対象にした低額のバス（シルバーバス）を発行しています。非課税者は年額わずか千円（月額ではなく、年額！）で、それ以外の一般高齢者が年額 2 万 510 円ですが、それを年額 1 万 2 千円に利用できるものですが、さらに今年の 10 月より引き下げると言うものです。実際に利用できるのは、都バスや都内を走るバスで、神奈川県内を走る区間は無効になります。都民であるあることが喜ばしいことか、町田市のように神奈川県と隣接する場合は運が悪いのか、適用区間外のエリアがあるものです。

この予算措置は令和 7 年度予算で都議会も認めたものであり、J R や私鉄の鉄道利用には適用されません。つまり、町田市のように、一般の移動で電車を基本とするエリアの人には全くメリットはなく、シルバーバスの鉄道利用はできず、通常料金の負担が必要となります。ただし、鉄道で利用できるのは、都電と都営地下鉄の全線、舎人ライナー線など区部の都営交通局が運行する路線であり、多摩地域の多摩都市モノレールなども使用できません。つまり、区部中心の施策と言えましょう。



小田急と JR を結ぶペデストリアンデッキ、鉄道利用者には 高齢者バスは無意味

○支持政党なしの方々の代表＝吉田つとむの基本理念は、良識ある保守主義です。

○吉田つとむは、「若者育成」をトップの政策に掲げています。

◎水耕栽培メロン 世界一決定戦を開催しよう！

町田市議会の無所属会派は、政党に所属しない議員 3 名で構成し、明快な議論を提起します。

シルバーバス事業費はバス協会と都交通局の支援策のための予算

このシルバーバス事業は、高齢者優遇のバス交付という「福祉」事業で総額 230 億円を予算化していますが、その IC カード化【福祉・交通】事業に 54 億円（新規）を見込んでいます。特記すべきことでは、今年度途中からの事業補助支出があり、利用者負担軽減分として 7 億円が充てられています。次の令和 8 年度からの通年分だと、さらに倍かかるものです。



JR 線利用者には割引は無縁。来年は JR 料金が値上げになる

当事者としてありがたいと思う人はあるかも知れませんが、東京都の交通問題では、23 区部地域に見劣りする交通事情の改善を図るために、多摩地域を南北に貫く、多摩都市モノレールの全線延伸事業が優先されるべきです。他方で、東京都内で過疎エリアとなる地域にコミュニティバスを導入する、あるいは運行している区間では事業支援をすることが東京都全域の均衡ある住民（都民）生活の施策と言えましょう。

私は、以前からこの東京都のシルバーバス事業の在り方に、疑問を呈しています。今後、優先する事業費として必要な予算は、子ども世代が校外学習などで出かける際の交通機関を利用する際の費用の低減化、あるいは無料化に充当化すべきであり、高齢者の福祉施策は、減少を図ることが肝要な施策と言えましょう。

＊旧来の福祉施策を見直し、子ども事業に充てるべき

インターンシップで若者育成の貢献
町田市議・完全無所属・良識ある保守

吉田つとむ



インターン体験記⑪森田 瑛斗

日経新聞鈴木亮編集委員と面談して

本日は日経新聞本社に伺い、編集委員の鈴木亮氏とお話をさせて頂きました。
スマートフォンの登場によりメディアの形もここ 10 年で大きく変化しました。それを踏まえ質問をさせて頂き、日経新聞の現状や記者にとって大切なことを教えて頂きました。まず初めに、日経新聞の強みを伺ったところ、電子版の存在とイギリスのフィナンシャルタイムズ買収などによるグローバル化を挙げられていました。電子版を導入するのが 2010 年と他社と比べても早かったため、発行部数の減少にもかかわらず、売り上げ面では伸びているとのことでした。また、フィナンシャルタイムズにインターンシップという形で社員を送ることで、海外で活躍する記者を育成することにも以前より容易になっているとおっしゃっていました。



記者として結果を残していくためには何が必要か伺ったところ、特に人脈が重要で、ノウハウ (Know how) ではなくノウフー (Know who) が大事だというお話は非常に興味深かったです。「人と会うのが嫌いな人は記者になれない」とも語られていました。十分な前提知識をもとに、情報がどこにあるのかを考え、自分の足で稼ぎに行くという地道な積み重ねが大切なのだと感じます。

- ◎町田市議議員 4 期連続トップ当選 吉田つとむのインターンシップは、参加者との個別対応が特徴です。
- ◎吉田つとむのインターンシップは、社会人になった先輩インターン生との直接面談が大好評です。
- ◎吉田つとむの元インターン生は、一般企業就職が最大で、次いで公務員。弁護士が 3 人。

また、電子版の紙版との大きな違いとして挙げられていたのが、記事のアクセス数が分かるためにどの記事が注目されているのかフィードバックを得られるという点です。人気な記事を把握し、傾向を分析することでより一層読者を増やすことが出来るのだと思います。一方読者によりすぎてしまうがために、記事の内容に偏りが生じたり、伝えなくてはならないことを伝えることが難しくなったりしてしまう恐れもあると感じます。メディアのバランス感覚がより一層問われる時代になるのだと思います。

東京大学医学部新卒 森田瑛斗 (第 55 期生)

<吉田つとむのコメント> この日、大手メディアの一つである日経新聞社を訪ね、編集委員である鈴木亮氏と面談の機会をセットしました。鈴木亮氏と私とのつながりは同氏が学生時代から縁があったもので、長年のお付き合いになります。その間、年上の私が彼に与えたことは国会議員との接触機会の提供以外になにもないのが現実ですが、その間に縁が切れることなく現在まで続いています。鈴木氏の人柄と言えましょう。

その間に、鈴木氏は自身が望んだとおりに経済メディアの中に身を起し、絶えず努力して現在までの確固たるポジションを重ねた人材です。そのことは鈴木亮氏が日経電子版の初代編集長を務めたキャリアからも伺えるものでした。

そしてこれらの側面のほかに、私には彼の学生時代から備わる才能として物事に対する「事件の核心」をつかむ天性が備わっているように感じています。これこそが、今に至るも、彼の活躍の基本になっているように考えます。



若い世代の育成に全力をささげる
町田市議会議員(支持政党なしの方々の代表)

吉田つとむ



ブログ 個人HP

メールは
左記を読込
して送信



インターン体験記⑬森田 瑛斗

町田消防署訪問：救急体制を視察見学

町田消防署にて、施設の見学をさせて頂いたのち、救急隊の活動についてお話を伺いました。
ポンプ車は 2 台セットで動くことを基本にしているとのこと、一台が火に近いところで初期放水を担い、もう一台が消火栓から水を取ってくる役割を担うとのこと。初期放水を行うポンプ車には最初から 2 トンもの水が積まれているとのことですが、それでも 2 分程度でなくなってしまうというのは驚きでした。



特に救急の話の中で興味深かったのが、Live119 と呼ばれる、119 番通報者がスマホで現場の映像を災害救急情報センターに送信することが出来るシステムです。応急手当の方法を必要な場合にはビデオを送ることで、適切に指示することが容易になるとのことでした。また、患者の意識状態なども確認することが出来るため、重症と見受けられる場合には早期から受け入れ可能な三次救急の病院を探せたというケースもあったとのこと。口頭のみ連絡だと通報者の主観が入ってしまうというデメリットがありますが、ビデオだと得られる情報も多く、スマホ社会の恩恵を感じます。

熱中症の多い夏、インフルやコロナの増える冬は特に救急要請が多く朝の出動が深夜まで及ぶこともあるそうです。また高齢化に伴い、75 歳以上の救急要請が増えており、救急出場件数は増加の一途をたっています。一方、救急隊の方々の働き方改革の流れもあり、より効率的なシステムの構築や、国民全体の救急医療に対する知識や最低限の初期対応を出来るような教育の必要性を痛感します。

東京大学医学部新卒 森田瑛斗 (第 55 期生)

- ◎吉田つとむのインターンシップは 1998 年に開始、2025 年 3 月末までに 111 名が参加しました。
- ◎ 第 55 期インターン生の森田瑛斗さんは、医師国家試験に合格し、4 月 1 日から研修医として社会人。
- ◎次回のインターンシップは、2025 年夏季第 56 期生の募集を開始しました。

インターン体験記⑭森田 瑛斗

民間企業による保健衛生事業を学ぶ

町田市を本拠とする民間企業である株式会社町田予防衛生研究所に伺いました。町田予防衛生研究所は食品の検査や検便、コンサルティングなど食品衛生にかかわるサービスを多角的に展開している企業で、全都道府県で取引を行っています。給食サービス(学校、メディカル施設、事業所食堂、寮など)や保育園・幼稚園、卸売り・小売りなどが取引先となっており、規模も様々だと伺いました。食品衛生にまつわる知識や企業の取り組みについて教えて頂いた後、実際に検査をしている様子や検便の検査を行う機械なども見学させて頂くことが出来ました。



食の「安全」「安心」とは一体何かというのは時代や地域によっても変わっていくもので、そうした中でニーズを捉えながら食品衛生に取り組むというのが企業のモットーだとお話しされていたのが非常に印象的でした。また、お話の中で、1990 年代に日本からフランスに輸出したホタテガイから基準値以上の貝毒が検出されたことに起因して、一時は日本産水産物の輸入が EU 全体で全面的に禁止されてしまい、結局ホタテガイの再輸出まで 2003 年までかかってしまったという事例を紹介していただきました。食の安全が担保されていないと思われてしまった場合には企業だけでなく国家全体にも大きな影響を及ぼし得ることを知り、食品衛生の重要性を痛感しました。食品を適切に管理しているということを客観的に証明するということの需要の高さがうかがえます。町田予防衛生研究所が今後どのような事業展開を行っていくのか注視していきたいと思っています。

東京大学医学部新卒 森田瑛斗 (第 55 期生)